



はじめに

第14回あの森を訪ねては、今までと少し趣をかえて、港北ニュータウンの中の公園やせせらぎのある緑道を歩く。

あわせて地域の歴史を刻む中世の城址や弥生時代の遺跡を訪ねる。

コースは、横浜市営地下鉄仲町台駅～せせらぎ公園～せきれいの道～茅ヶ崎公園～大原みねみち公園～ささぶねの道～センター南駅～茅ヶ崎城址公園～大塚・歳勝土遺跡公園～センター北駅。

距離約8kmとやや長いですが、平坦で車道と分離された歩きやすい緑道が中心。休憩所も各所につくられている。のんびりと樹林の中を歩き、遺跡でいにしえに思いを馳せれば、楽しい1日となること受けあいである。

港北ニュータウン

ここは横浜市都筑区。都筑(つづき)は読めない漢字のひとつだろう。奈良時代から、この地方を呼んだ名というからその歴史はふるい。

ニュータウンは、昭和40年(1965)に横浜市の6大事業の一つとして発表され、乱開発の防止、都市と農業の調和、市民参加、多機能複合型まちづくりを基本理念として、昭和49年(1974)の工事着工から20数年の歳月をかけて造られた新しい街である。

全体面積は2500ha余。その中には1340ha余の市街化区域、230haの農業専用区域、既存開発地なども含まれている。

造成前は、なだらかな丘と畑、谷戸の水田、その間には竹林やコナラ、クヌギなどの雑木林が広がる農村地帯であった。それが昭和30年代の高度経済成長により、丘は削られ、田畑は埋められて住宅地になるという、いわゆる無計画の乱開発が進みつつあった。



グリーンマトリックス

街づくりに当たっては、キーワードの一つに「緑の保全」をすえ、「グリーンマトリックスシステム」の構築を掲げて計画された。

具体的には、公園や集合住宅の緑地、建築物、樹林地、歴史的遺産などを緑道や歩行者専用道路を介して結合させるというもの。

せせらぎ緑道

マトリックスをつくる緑道は、ニュータウン内に15kmほどある。そのうちせせらぎのある緑道は、6水系で約7.8km。もと

もとの沢筋を活かして造られており、自然湧水と自然流下によって流れをつくり、水路断面をオーバーする水は下水溝に流入するように巧みに設計されている。



工事の完成から20余年たっているのに、木々も大きくなり緑も深みを増している。既存の樹林地と造成樹林地が一体となり街中の貴重な緑として存在を高めている。

歩いていると、梢の上や木間越しに高層住宅などの一部が見えるが気にならない。街の中を歩いていることを感じさせない。

そして、せせらぎを見ながら木々につつまれる中での歩きは、水に生まれ森に育った人類の記憶がDNAにきざまれているのだろう。何とも心地よくホッとさせてくれるものがある。



せせらぎ公園から歩き出す

前置きが長くなった。仲町台の駅から「せせらぎ公園」を目指す。池のほとりに移築された古民家の門をくぐり、池の端のベンチで一息ついてからせせらぎに導かれて歩き出そう。

しゃれたレストランもある「せきれいの道」をゆく。中原街道を跨ぐと茅ヶ崎公園の芝生の広場と池。右手の学校から子供たちの元気な声が聞こえてくるが、反対側はもともとの樹林と沢が残され、深山の雰囲気すら感じさせ、その対象がおもしろい。

公園や緑道沿いの樹木は、コナラ、クヌギ、ケヤキ、イロハモミジ、サクラ等で特に記すべきものはない。竹林が目につく。



地下鉄の線路を潜ると大原みねみち公園。ここからの緑道は「ささぶねの道」となる。

集合住宅の保存協定緑地を合わせて樹林地の幅が広がってくる。

ジョキングや散策をする人たちとすれ違う。葛ヶ谷公園は分水嶺。緩い下り道となる。緑道を横断する車道を潜り行くと鴨池公園の入り口。数人の子供たちが水路のザリガニ取りに夢中になっている。

ささぶね橋をせせらぎと一緒に渡りしばらく行く。

竹について

竹林が所々にある。もともとあったものもあるだろう。

竹は古来より資材や食料として

生活に密着していた。この地方でも大切に育てられてきたにちがいない。かつては竹の文化があった。

そのあかしに手元にある漢和辞典の部首を数えると「竹」が109字、「木」が278字あり、木にはおよばないが数ではない

竹の種類にはマダケ、モウソウチク、ハチクなど多数あるが、緑道周辺はモウソウチク。18世紀頃中国から渡来し広まったもの。

中央公園に向かう緑道と分かれ、心行寺を見ながら緩い坂を上ると緑道は終わりとなる。

区の総合庁舎や商業施設、病院などの建ちならぶ都会の一角にでる。

茅ヶ崎城址公園

センター南駅前の広場を横切り、歩行者専用道路の突きあたりにある緑のかたまりが茅ヶ崎城址公園。

茅ヶ崎城址は、早淵川を望む丘の上にある。城といっても近世の石垣を積み上げた城ではなく、空堀や土塁、郭（くるわ）などからなる城。良好な状態で残されている貴重な中世城郭遺跡とのこと。

西郭と中郭の間の空堀の底を歩いて、往時の姿を想像しながら北郭の広場から外周道路に出る。

築城は、相模・武蔵を支配した上杉氏や戦国時代の後北条氏が関与したと推定されている。



ここから鶴見川支流の早淵川を渡り、弥生遺跡のある標高50mの台地の上を目指す。緩い坂道を上る。ほどなく弥生時代の墓場跡

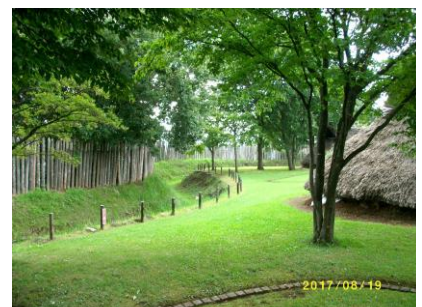
の緑の広場にでる。

大塚・歳勝土遺跡

この遺跡は、今から2000年前の弥生時代中期の人々が住んだムラのあと。ニュータウンの建設に先立ち発掘調査が行われ、集落の周りを溝で囲む「環濠集落」と「方形周溝墓」が発見された。

この時代、水田稲作の拡大で人口の増加とともに収穫物や耕地などを巡って集団と集団の争いが始まっていた。

そのため、この集落では、周り600mに幅4m、深さ2mの溝を巡らし、溝の外側には先をとがらせた丸太を隙間なく並べたて、外敵の侵入を防いでいた。



ということを知ると、2000年たった今も争いをなくすことができない現実を考え、何とも複雑な気持ちにさせられる。

住居跡の炭化木は、クヌギ、コナラ、それにカシやカヤなどとのこと。弥生の里山林に生育していたものを利用していたのだろう。

今も里山にある普通の木々だ。

現在、集落跡の半分はニュータウンの造成で失われ、残りの部分に盛土し、その上に往時の姿を復元した建物や環濠が造られている。

すぐそばに遺跡公園の開園と同時期に開館した横浜市歴史博物館がある。遺跡公園と屋上で直結しているのでぜひ立ち寄りたい。

ここからセンター北駅は近い。

2017.9 瀧澤